

株式会社ユーワークス

東京都医工連携 HUB 機構 | システム開発 | www.youworks.jp

距離が近いからこそ気兼ねなく共同開発ができる

「YOUWORKS」という社名ロゴがあしらわれた紺色のジャケット。東京都医工連携 HUB 機構が開催するイベントでよく見かける。文京区湯島に拠点を設け、近隣の医療機器メーカーからソフトウェア開発の受託や医工連携に積極的なユーワークスのものだ。同社は 2001 年に筑波大学 OB が仲間とともに立ち上げた企業。創業の地は茨城県つくば市で、研究機関向けにバイオイメーシングや、顕微鏡関係の画像解析などの特殊なソフトウェアを開発してきた。医療に参入したのは、これらのソフトウェアと医療に技術的に近いことが第一の理由ではない。実は“採用難”がきっかけだったという。“風が吹けば桶屋が儲かる”と言わんばかりの同社代表取締役社長 吉本英治さんに話を聞いた。

医療機器への参入のきっかけは“採用難”

「社員のライフステージの変化、下請け脱却、人手不足など、いろんな事情があいまって、本郷・湯島で医療分野に参入を果たすまでに繋がっています」と吉本さん。「兎にも角にも“採用難”が出発点です」と強調する。



ユーワークス代表取締役社長 吉本英治さん

設立当初は、吉本さんを含め独身の社員が多かった。「学生上がりの会社だったので、大学の研究室みたいな雰囲気でも働きますというような感じでした。それを苦とも思わなかった」と吉本さん。そんな仲間も今や 30 代。結婚して子供が生まれるなど、ライフスタイルも変わった。「子育て世代の社員が自分の時間をコントロールできないというのは、申し訳ないと思いました」と、当時を振り返る。

つくば市という土地柄もあり、研究機関からの特殊なソフトウェア開発の受託で一定の売上げは維持できた。創業から 5 年後、都内での事業展開を狙って新宿に本社を移した。物流からゲームまで産業は絞らず、とにかく引き合いがあれば全て対応するというスタイルの受託開発企業として下請けもやっていた。その下請けは同社の売上の半分を占めていたが、2011 年の震災をきっかけに“脱下請け”を決めた。震災の直後で電車も動いていない時でも、4 次請けは 3 次請けに逆らえず、発注元に出向けと言われたら行かねばならない。こうした

多重下請け構造に疑問を抱き、研究機関や大学などを相手とする仕事に専念すると決めた。3 年で下請けをゼロにしようと誓い、達成した。公的機関に対する実績を積むにつれて、新しい案件が入りやすくなった。その一方で、入ってくる仕事に対応できるだけの人手が足りない状況に悩まされた。それが 2014 年頃。広く募集しようとネットサービスを使って採用活動をしたものの、欲しい人材は集まらない。東京という土地柄、楽天やサイバーエージェント、DeNA など華やかな IT 企業が密集しており、中小企業が彼らと同じ土俵で人材を採用しようとしても勝ち目がないのは自明のこと。ここで吉本さんは採用に有利に働くようなオリジナリティ重視の作戦に出た。

まずは原点に戻ろうと、採用拠点としてつくば市に開発拠点を再度設けた。つくば拠点とのアクセスを考え、新宿から秋葉原に本社を移そうとしたところ、千代田区は割高。予算に合った物件が見つからず、不動産会社から紹介されたのが、秋葉原にほど近い文京区湯島の物件だった。2015 年 1 月に移転してからは、大学のキャリアセンターに足繁く通うほか、海外拠点を開設すべく何度か東南アジアを視察し、2017 年にはミャンマーに子会社を設立した。

湯島という地域が“医療機器の街”だと知ったのは、移転から 4~5 ヶ月後。社員が効率よく仕事ができるよう、近場のクライアント探しに奔走しようという時期だった。

「ここはどんな街なんだろう」と、東京医科歯科大学の近くにある本社から東大病院がある本郷三丁目の方へ歩いて行みると、一目瞭然、医療機器メーカーの看板がひしめき合っている。

「医療関係の開発は未経験でしたが、研究機関向けの特殊なソフトウェア開発には実績があったので、相性は合うような気がしたんです」と吉本さん。すぐに、文京

区の区役所に出向き、経済振興課を訪ねた。「医療機器に挑戦したくてこの土地に引っ越してきました。今後ともよろしくお願いします」と、挨拶をしたその1週間後に、経済振興課の担当者から医療機器のイベントに誘われた。8名のキーパーソンと名刺交換を促されたが、そのうちの1人が、フジタ医科器械の前多宏信社長だった。医工連携では馴染みの顔だ。

しばらくすると「オフィスも近いので一度会わないか」と、前多さんから電話が入った。医療については実績がないと話しながらも、「多分できると思う」と吉本さんはやる気を示し、これまでの開発実績から技術力をアピールした。

前多さんに誘われて、東京都医工連携 HUB 機構が開催する医療現場の困りごと発表会（臨床ニーズマッチング会@国立国際医療研究センター）に参加した。名刺交換をした医療機器メーカーの多くは、本郷や湯島にある会社で、うち数社とはシステム開発の受託につながった。2年後には同社の売上の20%を医療関係が占めるほどになった。

本郷の医療機器メーカーのIT部門になりたい

吉本さんが前多さんから相談を受けたのは、BLE（Bluetooth Low Energy）という低消費電力の通信技術についてだった。非常事態でも電源が切れぬよう、医療機器のセンサーには低消費電力での通信が求められる。ユーワークスにはBLEの経験はなかったが、仕様書があれば開発できる自信があったため、「弊社ならできます」と言い切った。体に装用したセンサーから心電、血圧、脳の酸素飽和度、体表温度のデータを取得し、スマートデバイス型の生体情報モニタに1画面で表示するソフトウェアを開発した。別アプリに切り替えればエコーも表示できる。5つのセンサーをBLEで通信するという難課題も解決し、心電図のプログラムも自社で開発した。これが同社にとって初めての医工連携の取り組みとなった。

「社内にソフトウェア開発のエンジニアを抱えている中小の医療機器メーカーは少ないようです。そういう意味でも、弊社が各メーカーと近い場所に拠点を置いたのは意義のあること」と吉本さん。急に実機が必要になっ

た、あるいはトラブルが発生したといった事態にも、3分で駆けつけて要望に応えられる。距離が近いからこそ気兼ねのない関係も築ける。



フジタ医科器械と共同開発中のスマートデバイス型生体情報モニタ

「医療機器は“多品種小ロット”。一つひとつの製品のマーケットは大きくないから中小企業が乱立しているという話も聞きました。ここも相性がいいと思ったポイントです」と吉本さん。同社は横展開をしなくてもいい、一品モノのソフトウェア開発を手がけてきたため、“多品種小ロット”にも経験的に通じている。

「医療には独特のがありますけれども、前向きに苦勞しています」と笑顔をのぞかせる吉本さんだ。



会社概要

社名 株式会社ユーワークス
住所 東京都文京区湯島 3-7-5
長坂第2ビル 3階
TEL: 03-4455-7292
代表者 代表取締役 吉本 英治
設立 2001年2月

- 医療機器製造業
- 全省庁統一資格
- プライバシーマーク